

Title	コール著 コルベールとフランス重商主義百年史
Sub Title	Charles Woolsey Cole. "Colbert and a Century of French Mercantilism"
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.3/4 (1951. 4) ,p.174(100)- 176(102)
JaLC DOI	10.14991/001.19510401-0100
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510401-0100">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510401-0100</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評  
「コルベールとフランス  
重商主義百年史」

Charles Woolsey Cole. "Colbert and  
a Century of French Mercantilism"  
(2 vols. Columbia University Press:  
Humphrey Milford, 1939. p. XII+532  
and 675)

渡邊 國 廣

本書は知識の大きな寶庫である。但し冒頭の第一・三章と第四章の一部とは、そこに盛り込まれた若干の新事實を除けば、著者コルベールの一九三一年の小著「コルベール前のフランス重商主義學說」(French Mercantilist Doctrines Before Colbert)の單なる要約に過ぎない。そしてこれに第四章の残りや第五章とを加へた本書最初の二七七頁においては、著者の關心は専らコルベール以前のことに向けられ、その間に出版されたパンフレットや樹立された計畫の一つ一つにつき明細に記述してゐる。コルベールの生涯と彼の經濟思想とを取扱つて特に興味深い第六章に続く諸章は、「商業」、「東印度會社」、「植民地」、「製造工業」、「産業統制」、「國內發展」に分たれ各章における説明もこれ亦詳細を極める。そして以上の二一〇頁にも垂んとす

る膨大な記述を、著者は「回顧と結論」と題する極めて暗示的な短かい一章に總括し、卷末に史料を多く含む附録を添へてゐる。本書には特許狀・條令等が屢々小文字で、時には一〇頁にも亘つて要約されてをり、しかも殆んど同一の内容を持つた二種類の特許狀すらも、その一つ一つが譯載されてゐるくらいであるから、本書はその記述の詳細といふ點になるとコルベール時代を釋明して數ある類書のうちでも追従するものが全くないばかりか、史料を涉獵して提起することの忠實な點にかけても甚だ卓越した研究であるといはざるを得ない。かかる意味では誰もコルベール教授のこの著作を非難することはあるまい。事實教授自身次の如くいつてゐる。曰く「本書は英語を話す諸國の學者に對してと同様にフランスの學者にとつても有益であらう」(Vol. I, p. VIII)

ることを絶えず苦慮した點にあつたのかも知れない。しかし著者の場合、自ら必要と認めた一切の事項や事件の脱落を恐れること餘りに大きいため、かかる野心的な意圖は、それがこの全篇を通じて完全に實現されたかどうかは全く別の問題として、如何なる讀者にも理解されずに終つてゐるのではあるまいか。寧ろ却つてコルベール教授のこの研究では、例へば「ガベルは勅定の鹽稅であつた」、「タイユは、或る地方では人に、或る地方では物に課せられ、平民即ち特權階級の構成員(貴族や僧侶)でない人達によつて支拂はれる稅金であつた」、「縮入麻布(roussin)の佛語はフエテヌ(Futene)である」(Vol. I, p. 52)といったやうな、門外

であるとすら感じさせられる。現に「明確たるべきこと」をその出發に際し謳つた著者は (Vol. I, p. VIII) 全く逆の結果に陥つてしまつてゐる。

者や初學者にとつてのみその必要が感じられる類の記述が繰返されてゐるから、或ひは啓蒙書たり得るかも知れないが、端的には本書は不適當な多くの記述によつて、讀者を落膽させずには置かまい。正に詳し過ぎて却つて扱ひに苦しむともいつたらしいかもしれない。

方法の緻密がしかし必らずしも歴史理解のために有利だとは思はれない。原史料の取扱ひに對するかかる極端に綿密な態度は、それが歴史研究者の便宜を考へ、或ひは又それが史料提示の貧困による自著の目的の挫折を懸念してのことであつたにしても、ここでは問題の焦點を徒らに疊してゐるのみで、本研究の價値を高めてはゐない。「細事に捉はれば大局が見えない」といふ諺は、本書の如き研究に對し與へられた最も恰好な言葉

である。然らば何故か。それは、本質的には一つの理念である重商主義を、複雑な事實の單なる連續としてのみ考へようとした誤つた態度によつたものではなからうか。コルベール教授が重商主義を扱ふ場合、代表的な論者の一人一人について、その思想なり或ひはその行動なりの異同を究明するといふ殆んど傳統的な方法が無造作に援用されてゐる。ところで各個人を繞る諸問題の詳細にして且つ集中的な研究は、場合によつては有用なこともかも知れないが、しかしこれでは重商主義の長期に亘る發展の現實の様相が隱蔽されないまでも、容易に捕捉され難いものではあるまいか。假令コルベールを研究することが重商主義に最もよく接近する所以であることを認め得たとしても、かかる態度は勢ひ重商主義自體の研究といふよりも寧ろ重商主義者の思想や行動の吟味に遂に終つてしまふのではないか。かかる態度は又コルベールの政策の大部分が既にリシュリユ(Richelieu)によつて開始若しくは唱道された政策の單なる繼承にしか過ぎないことを自覺してゐながらも、尙且つその連繫については具體的に觸れず、問題を全く個別的に扱ふ結果にならぬとも限らない。總じて種々な事象の一つ一つに詳しく、取上げた問題の全部を貫ぬく有機的な關聯が缺如してゐる點を、本書に接した者は誰でも飽足らな

コルベール著「コルベールとフランス重商主義百年史」

く思ふであらう。しかしここで若しも原著の表題が「フランス重商主義百年史」から「フランス重商主義者百年史」に書替へられたとするならば、かかる不満も幾分は緩和されるのではなからうか。個々の知識は得られても、一様の體裁を保ちながら纏つた知識の提示が出来なかつたのは本當に惜しい氣がする。

實にコルベールは歴史の大きな流れにおいて嘗て一つの中心であつた。又彼の努力がやがて後の歴史を左右するに至つたともいはれて来た。しかしこれは事實においてはコルベールを研究する場合の單なる前提であつて、これを以て彼の全活動を積極的に價值づけたと思ふならば餘りにも早計であらう。例へばコルベールによる産業の統制を問題とする場合、その原因なり經過なり又結果についてそれが正しかつたのか或ひは誤つてゐたのか、役に立つたのか或ひは害になつたのか、賢明だつたのか或ひは無分別だつたのかといふことが終始問題とされなければならぬであらう。かかる意味ではコルベール教授の態度は重商主義の研究にとつて餘りにも客觀的過ぎると思はれる。そして又そのやうな意味では本書はフランス重商主義の歴史といふよりは、實は一聯のフランス重商主義者の百科辭典とでもいつた方が當つてゐるかもしれない。勿論その場合原史料に忠實な立派な百科辭典であると附言する必要があるであらう。原史料參看の機會の少ない今日の我々にとつて、かかる限定付けの上には價値あるものといはねばならない。(一九五〇・一一・二八)

評書

小高泰雄・高橋吉之助共著  
『簿記概論』

西垣富治

或る一つの主體の下に財(勞働をも含む)が統一されて、それ自體經濟を営んでいる組織體であるならば、その組織體は、必ず、何らかの方法で簿記をもつ必要を自ら感じるようになるであらう。そのことは、消費經濟を営む家、もしくは、國家であつても、生産經濟を営む企業であつても變りはない。しかし、前者においては、その簿記は、主として、收支計算のために行われるのであるから、比較的單純な方法が用いられる。それに對して、後者は、主として損益もしくは所得を期間的に決定するために必要となるのであるから、その簿記は、企業の經濟活動に伴う諸現象、すなわち、經營經濟現象を時間的に秩序正しく記録し、計算し、整理して活動の成果を正確に決定しなければならぬ。ただ、事務上の經濟性、もしくは、マテリアリティーの原則に基いて、その精密性には自ら差異があるとしても、その成果を確實に決定するためには、どうしても完全な簿記を必要とする。

完全な簿記とは、複式簿記を指しているのである。それ以外

の不完全な簿記は、これを總稱して單式簿記と呼ばれる。複式簿記は、極めて簡明な理論の下に構成され、しかも、それによつて複雑な經營經濟現象が逐一計數的に記録される。これを分析しもしくは總合し、比較することによつて企業の財政状態、または、經營成績を明かにすることができる。この意味において、簿記は、最も優れた科學的な記録方法であるといわねばならない。それにもかかわらず、多くの入門者は、ただ「面倒臭い」という一語の下にややもすれば、その勉強を放棄しようとするようになり易い。就中、學生の多くは、その内容が金錢取引に關するものであることから、それに興味をもてなくなつてくるようである。そこで、簿記に興味を起させるためには、先ず、その教授法の研究に力が盡されなければならない。ところが、一般に、簿記書は極めて没趣味的であるばかりでなく、その説明法が、最初から部分的な項目をあまりに精細に述べ過ぎる傾きがある。企業活動の全體をまだ充分に理解しないものに對して、その部分的構成をいかに細密に説明しても、それは、徒らに、學生を疲らせるだけであつて、あまり効果はあがらない。従つて、最もよい教授法としては、先ず、第一に、企業活動の全構成を概説し、漸次、單純な原理から複雑な活用にごこれを展開せしめ、全體から部分へ、部分的説明から細目に及ぶという順序が選ばなければならない。

本書は、二五四頁のA5版で、全文を五章に分け、その内容

は次の通りである。

第一章、企業における資本の循環　ここでは、全體としての企業活動の本質を説明し、何故に、企業が資本計算制度として、簿記を採用しなければならないかという理由を明かにする。

第二章、複式簿記の構造　複式簿記のメカニズムを明らかにするために、勘定、貸借、仕譯の意義、及び、その性格を説明し、さらに、各種の勘定科目についてその具體的な記入方法を示す。

第三章、決算の手續　ここでは、決算の方法を記入例によつて説明する。試算表の作成、精算表による運算、帳簿の締切、及び、決算報告書の作製という順序で述べられる。

第四章、諸種の取引仕譯法　特に重要取引として手形、商品、及び、資本に關する諸取引をとりあげて、その精細な説明が行われる。殊に、株式會社の資本については、今次改正の商法規定に即して、資本剰餘金、利益剰餘金の區別、授權資本、無額面株の處理、剰餘金處分等に關する新しい諸問題が詳しく説明される。

第五章、帳簿組織　最後の章として、帳簿組織の發達及び帳簿の構造に關する解説が行われ、また、それに附帶する諸傳票が可なり詳しく述べられる。

本書の全章を通じて強く感ぜられることは、著者が常に經營